

## 最 終 試 験 の 結 果 の 要 旨

神奈川歯科大学大学院歯学研究科 口腔衛生学講座 石黒梓 に対する最終試験は、

主査 槻木恵一 教授、副査 平田幸夫 教授、副査 木本 茂成 教授により、主論文

ならびに関連事項につき口頭試問をもって行われた。

その結果、合格と認めた。

主 査 教 授      槻 木   恵 一

副 査 教 授      平 田   幸 夫

副 査 教 授      木 本   茂 成

## 論文審査要旨

1. Pre-testing and re-testing are preliminarily necessary before full questionnaire survey
2. 3歳児の保護者における噛みごたえのある食べ物の認識
3. 3歳児とその保護者における噛みごたえのある食に関する認識調査

神奈川歯科大学大学院歯学研究科

口腔衛生学講座 石黒 梓

(指導: 荒川 浩久 教授)

主査教授 槻木 恵一

副査教授 平田 幸夫

副査教授 木本 茂成

## 論文審査要旨

学位申請は、① Pre-testing and re-testing are preliminarily necessary before full questionnaire survey、②3歳児の保護者における噛みごたえのある食べ物の認識、③3歳児とその保護者における噛みごたえのある食事に関する認識調査の3つより構成される。これら内容は全て食育に関するものある。②は平成23年度県民歯科保健実態調査において、保護者が3歳児の食事に取り入れている噛みごたえのある食べ物に、一定の傾向がみられないことを明らかにしたものである。さらに申請者は、乳歯咬合が完成する3歳までに噛みごたえのある食品を摂取させるにはどうしたらよいのかという疑問を明らかにしようと次の研究を計画し論文としてまとめた。これらの研究は、歯科衛生士としてふさわしいテーマを追求している。

手法として質問紙調査法を選択したが、オリジナルな質問を作成することから、質問の再現性などが保証されたものを本格調査に使用したいと考え、本格調査前にプレテストと再テストを行い①の論文として公表した。これは、歯科衛生学研究の世界で多用されている質問紙調査が、プレテストと再テストを実施せずに安易に用いられている現状に一石を投じるものである。国際的にも質問紙調査の再現性保証の提言をしたいという主旨で英語論文として公表した。その後、3歳児の食と7種の食品に対する噛みごたえレベルの認識を調査し、子どもが摂取する食事の噛みごたえは、食生活環境、保護者の噛むことの有用性に関する知識や食習慣と関連があるかどうかを検証するために本格調査を実施し学位申請の根幹となる論文を作成した。

一連の研究の大目的は、生活者が実際に利用できる噛みごたえのある食べ物の目安を作成することであり、本格調査は神奈川県公衆衛生協会調査研究助成のもとに、倫理的配慮も十分になされたものである。かつプレテストと再テストによって再現性を確認した質問紙を用い、独立性・適合性の検定、ならびに重回帰分析を活用するなど、研究デザインと分析方法も適切である。過去に同様な調査研究がないため、得られた結果は新規のものが多く、この研究が先行的な位置づけになり、これからの食育活動の指針にもなると評価した。具体的には、3歳児の保護者は噛みごたえのある食材を選択しているものは少ないが、よく噛むようにと声かけをしている者は多い。したがって、噛むことの重要性はある程度浸透しているものと解釈し、噛みごたえのある食品例を周知する必要があるものとした。さらに、噛みごたえのある食品を取り入れるには、離乳完了時期が遅く、夕食にかかる時間が長く、噛みごたえある食材を選択していることの寄与率が高いことから、これら3要因を啓発していくことも、子どもに噛みごたえのある食べ物を与えることにつながると考察した。そして、保護者への食育を行うことの必要性か

ら、3歳児健康診査受診児の保護者に、噛むことを推進するための啓発資料を作成し実際に配布するというフィードバック措置を実行した点も評価した。

審査時の質疑応答では、上記以外にプレテストと再テストによって修正した点や今後の研究の方向性などについて質問された。それに対して、修正点としては質問のワーディング、配列、強調の方法であるとの回答であった。また、今後の方向性として、実際に噛むことので健康教育を行い、その成果を介入研究によって検証したいという明快な回答が得られた。以上の結果、本審査委員会は申請者が博士（歯学）の学位に十分値するものと認めた。